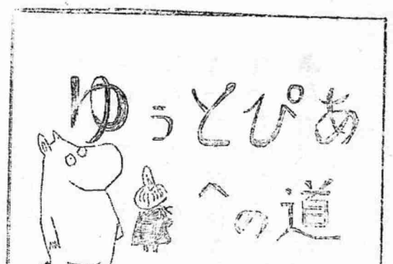

久しぶり 特別号

1972年4月7日 山

これを、刷って下さった方、ありがとう。感謝します

本題名を書くのも久しぶりです。本号は特号ですので蘇生しました。よってガリ切り途中で眠っている通十号（感謝報告号）とは、無関係です。十頁程、切ったのと紙型が異りますので。

これが、新しい友人（あなた）とお会できるようになりました経過を。（ささん、ありがとう！）自連三五号を紛失し、（又、これば廃っていたのですが）ミニコミ特集号を注文致したところ、領収書にささんが「参加してくらはりませんか？」と添え書きしてくれてありましたので、最近思ってることを書いてみます。

自由人

――上野雷里氏の最近の著作『放浪の回帰線』を読中のまとめ――

「放浪の回帰線」（行動社刊――岩手県一関市地主町五の一）の感想を書こうとしたが、筆が進まない。それで、読中のメモから進めてゆく。

I

革命――解放――自由という図式があると云う。革命が自由を得うる手段だとかそのようなことを、よく耳にする。このことは、マルキストもアナキズミスト（アナーキスト）も言っているらしい。（マルキズムの言う解放・自由は、ソヴェトロシアや中国を見ても、又、内ゲバと称する正行為を見ても明らか当然――知識力イモを中心とするクーデターにすぎない――よって問題とするに足りない。）ここで私は、アナキズミストなる語を用いた。私は、自由人の思考・行動・生活こそが、アナーキストというに、ふさわしいと思う。（ここで注意されたい、アナーキスト、即自由人でないと言うことを。）こう書いてゆくと『お前は、アナーキズムを理解していないだろう』と、あなたは、云うでしょう。「そう、私は、アナーキズムを知らないばかりか、今後とも、アナーキズムを理解しないでしょう。だが、アナーキズムのイズムに毒されないアナーキスト（特別に「自由人」と解さなくてよい）になるよう努力するだろうな。」と、返答したい。

アナーキズムの理論が、統一的定義が、あれば、アナーキズムを用いるのは、勝手である。現在、アナーキズムと言われている間口は、広い。啓蒙的アナーキズム（プルードン主義・ボストン派・個人主義的・宗教的）・行動的アナーキズム（バクーニン主義・上記以外の行動的・クロポトキン主義）・リバータリアニズム・サンジカリズム・アナルコサンジカリズムなどと分けられるようである。（上野氏は、「進化論的無政府主義・革命的無政府主義・個人主義的無政府主義」（前掲書 頁四六四）としている。――分類についてゴタゴタするのではない。）また、（マルのように主導権争い・仲間うちのセクトと異なると考えるが）これらの各主義内に於ても、多少の差異があると思う。特に個人主義的アナーキズムの範中に入れられるなかに、何を思想基盤にしているか、疑問もある。一つ言い得ることは、国家悪から出発している、ことである。と言っても、H・D・ソローなどもアナーキスト（私のいうアナーキズミストは、）に数えるらしい。が、『ウォルデン』を読む限り、文明、現代文明初発期のそれを、問題にしていたようである。国家悪については、述べてなかったように思っている？ すれば、アナーキズムが、反国家国家悪＝反権力及び、自由の問題のみを、基盤とするのであれば、ソローやスルナーなどを、アナーキズムの範中に入れなくともよい。むしろ、その方が、反権威の姿勢に近ずくのでは？（これに関し、マルは、やたらと、古代人の著も引き合いに出し、自己の立場の正当性を主張しているようにみえる。）でも、私は、反国家（反権力）主義＋自由主義のみをもって、アナーキズムを支えているのではなかろう。それも、多中の一理かもしれないが、もっと重要なことは、自己内部・個から出発してるのでは。（もちろん、「自由」の概念のなかに、このことも含まれようが、もっと別の広い意味に解して）

もし、個が形成にいるとすれば（仲間がいないと、誰かの助言がないと、何もなし得ない人――私なぞもこの中？――もいるが）、それに文明論・国家論・組織論等（それらを否定するものも。）が、加わり、自由人としての行動が、生活があるように思う。

とすれば、アナーキズムの枠内を（一つの枠を自ら設定しその内で思考・行動する）もうけるアナーキズミストより、例えば、「蒸発」した人、自らコジキになり放浪している人、夫を捨て男を追っていく人・山谷の住人の方が、自由人ではなかろうか。（私の偏見であるが）。あなたは、辻潤なるゴジンを、どう評価されるかわからないが。妻であった伊藤野枝を大杉に寝取られて?!より、アナーキストに、自由人になったのではなかろうか。（同様に、伊藤についても言えよう。）

このように、社会・国家・仲間・同志がなくとも行動・生きていける人を、アナーキストというべきであり、元来いわれているアナーキストとは、アナーキズム信者というのがいいと思える。

再度、自由人をアナーキストにする（アナーキストとよぶ）必要はない。しかし、アナーキズムそのものを、アナーキズミスト考え直したらがよい。所謂、アナーキズミストは、（過去の遺物化した先人・故人）アナーキストの思想に、負われ、又、追い過ぎているように思える。

II

（この頃は、私自身まだ〈〈わかっていないところが多々ある）

私は、これまで、アナーキスト、或いは自由のもう一つの（重要な）側面である、生（性と書いた方がいいのか？）と死について、何も書かなかった。というのは、自由人にも、この問題をもって二つのタイプが、あることである。（これによくにたことのか？の別稿参照――自由人たちについてではない――→新たに友人となる。あなたには、すまない！ これを、自由人にもあてはめる） それは、ニヒル的自由人であり、アナーキー的自由人である。（私がいいたい「ニヒル」とは、大沢・秋山著『幸徳 大杉 石川』の二九〇頁に、「アナーキー」は、野田訳『ロシア アナキズム全史』の「訳著 とがき」に、それぞれ近い表現と考えられたい。私自身思っていることを充分表現できない。）

急註――「アナーキ」なるなる語の引用したついでに、前掲書（野田の文）を読み返し、ハッ！とした。彼は、自由人として生きているのかどうか、判明しないが、アナーキズミストであることは、間違いないだろう。――この思考が、現代アナキズミストの潮流であるかどうか存ぜぬが――彼は、アナキズムをより高める為に、（私が、Iの最後で述べたこと）憤気されているようである。急註終り。

ニヒル的、アナーキー的にもどるが、

というのは、前者と後者で生死の受けとめ方が、異っているようである。かと言って、どちらが、生だ、死だ、とは言えない。共通項として考えられるのは、生・死を自分のものと、それも身近なこととして、思考の大きな部分を占め、また、前記したが、自己を単なる物＝物質とは考えなく個を、自分を、精神を、大切にしていることである。

（詩的表現で、ほめるが、）前者は、日没後の山脈のその大カイライン（タヤけではない。空の透明・雲の輝き）と、今にも、動脈しそうなシルエット。）が、後者は、日出の、燃える太陽（雲が、鮮やかに染まりゆく）が、浮びくるそれである。

今日（二月二十八日）は、十時から十九時位まで、T.Vを見ていた。例の戦争ゴッコを。どの局も創意的な発言はなかった。僕は、革命（革命）なんて信じゃ、しない。クダランことである。だが、彼らを見ていると、社会とかを構成している奴隷どもに、腹が立つ。無責任な発言。自分と彼らとどこが違うのか、同じじゃないか。弱肉強食の、他人の犠牲のうえに、個人を形づくっている現在を考えないで、あれは、彼らの行為は、現代のシンボルなのだ。彼らは、マルキスト特有の人民・大衆をあてになどしなかった。外からの奴隷の声になぞ聞く耳を持たなかった。最後まで命乞えをしないで冷静な判断を行なっていた。それに加え、人質の安全を守る為、有毒なガス（CNガス）の目くら打ち、毎分十立米の放水等、奴隷に支持された犬達の蛮行をみろ。犬が死傷して、奴隷達は、怒った。犬が銃を用いないのに暴徒が用い殺したと。だが、考えてみればわかる。捕虜とされた時、犬たちは、何といったか。それは「殺してやりたい。殺りたい」と。奴隷の前では、それらに支えられなければ、成りえない犬ら・その上部――ピラミット。

それに、彼らの内の一人の親が、息子の行為を詫びると、首つりをした。愚かだと思う（たとえこれが、親の気持としても。） この親にして、この子ありの感じだ。

彼らは、三島とは異り、自由人により近い思考をもっているようだ。私は、何度も述べるが、マルキシズムも（アナーキズムのいうところの）革命も信じようとは、思っていないし、信じない。「泰子さん、〈〈」「君らも人間だったら……」の声の内での少数者の行為だけだったのだ。

紙面を、また〈〈、横路に入り、汚しすぎた。以下、紙面も限られているので、IIの、りちょっと、IIIとIVと、それに、メモを簡略に記すに留める。

ニヒル的自由人（生・死をふまえているが）　瀟然。
アナーキ的自由人　瞬間→その永続化。

IIIとIV、私の場合（私とは？）・ニヒル的自由人。浪人。横とは？（私との対比）・仙人。まえの、一週間2食くったときのこと。今の食っていること、

III、自由人と秩序。無秩序的日常が？ 無権力下の諸民族。自己を制する――→日常の自らの規範。アナーキストは自由人でない。 自由人の精神（無神論か、有神論か→自己の神仏。）（他人との関係）

IV。自由人と共同体 二者の並一はできるか。三号の各頃と結び→結びに私があること。私は、共同体主義よりユートゥピアニズムを。キブツこの全体主義。革命否定と文化運動論（秋山三喜雄氏著の「旧」自連百号ぐらいより後、「月刊キブツ」'72－2、及び私への書翰）について。自由人の社会。（以上、IIIよりは、メモのみ、これらについて、除々に私なりにまとめるつもり。）

○○○○○○○○○○○○○○○○

エリゼ・ルクリュ J.Elisée Reclus の著作・彼に関するものを探しています。（「世界文化地史叢一」石川訳をのぞく。） 誰かお譲って下さい。和訳に、かなわらず。） 又、著作が、現在どこかで出版されているのを、御存じでしたら、発行元・価格等を、お教えして下されば、うれしいのですが。 特に望んでいる作：前掲書以外の巻「地と人（世界文化地史）」、「環境の勢力」、「進化と革命」「地理学教科書」（その他でも、「地と人」第六巻以上、和名。進化と革命）